

地震の時私たちは ～それぞれの思い～

豊浦町立豊浦中学校
片桐 和宏

1. 胆振東部地震を話すことの是非

2018年9月6日3時7分59秒、胆振東部を中心としたマグニチュード6.7の地震が発生した。最大震度は厚真町鹿沼の震度7で北海道では初めての震度7となった。犠牲者は42人と特に厚真町に集中し厚真町の吉野地区では住民の半数が犠牲となった。地震の被害だけでなくブラックアウトという前代未聞の事態にみまわれ不安な日々を送ることにもなったが、数日のうちに徐々に電気も復旧して、テレビなど使用できるようになり、ニュースで被害状況が放送され山体崩壊した山々や土砂崩れによる家屋や、通行止めになる道路が散見されたなど思った以上の被害に誰もが驚愕したことだろう。被害は胆振だけでなく札幌市でも被害が甚大だった。

さて、全道大会への研究発表を行うにあたり、新たなテーマでスタートしたばかりの支部の研修は内容的に発表できるところまでは到達がむずかしい情勢だった。様々なことを検討した結果、胆振東部地震について何か伝えられるものはないだろうかと考えた。

研究発表の内容は、危機管理マニュアルの作成や、災害時についての備え、災害に関する諸手当の請求方法、被災した備品の処理の方法でもない、各学校それぞれの対応でもない。支部の研修とは切り離して、事務局サイドで進めていくこととし、学校事務職員として、地震直後に感じたこと、行動や生活の不安、仕事への不安などそれぞれの学校事務職員が感じたことを共有することで、突然起こる震災に対しての心構えについて考えていくこととした。

2. それぞれの思い

東部地区会員から災害時の行動や思いについてアンケートを採りました。抜粋して紹介する。

(1) 地震発生後の行動について

① 3時20分、外に出て同じ近くの住人と情報交流のあと独居老人宅への安否確認の付き添い。このときの心情としては・・・正直まず、この状況の中、最初に何をすべきなのか？優先順位の正解は？との自問自答だった。

② 自分の家は何とかなる感じだったので、実家に行こうとしたが、車庫のシャッターの巻き上げができなくなり、すぐには出かけられなかった。何とかシャッターを上げて車を出した。実家に行く途中は道路が隆起していたり、段差があちこちにできていた。実家では壊れたものを片付けたり断水していたので給水所に水を汲みに行ったりした。自宅に戻っても停電と断水なので給水所に飲み水とトイレの水をもらいにいった。

(2) 親兄弟親類等からの連絡について

① 実家から「学校に行くなんてとんでもない。震源に向かって行くなんてありえない」と止められました。同居している配偶者にも同様のことを言われたが、出勤の指示が出ていたので、両親には内緒にして配偶者の運転で出勤した。

② 自分と家族の身の安全確保ができないと動けないと思った。もちろん学校も心配なのは言うまでもない。でも情報が無い中で、学校から来てくれと言われて判断に非常に困った。

(3) 地震後にどうしたいと思ったか

① スーパー等に食材を買い求める客が幾重にも並ぶ様子を見て、食材の購入を諦めた。しかし、妻が停電、その後の余震による二次災害に備え必要な備品等の購入にかけまわりなんとか確保しましたので安心感が増した。

(普段から災害に備えた準備をしていくことの大切さを痛感した。)

② 学校に行きなきゃという気持ちはあったが、情報が無い中で津波が心配になりすぐに学校には行けなかった。学校や生徒が心配であるものの、自分の命をまず守らないと正直なところ思った。

③地震のショックで何も考えられなかった。子どもや親が心配だった。

④管理職だけでは大変だから夜間当直をしようと職員から声があがってシフトに名前を入れていくような流れができた。名前を入れざるを得ない状況に疑問を持つ人もいただろうと言える状況ではなかった。

(4) 一個人としての心配ごとについて

①天災等に遭遇した場合、家族の集合場所等を打ち合わせておく等重要なことと感じた。子どもを家において学校へ出勤することとなってしまったが、今思うと、そういった状況になるのも公務員だからしかたないと単純にはいえない思いもあった。たまたま家を留守にしている時大きな余震等がなかったので結果論ですが、不幸中の幸いだった。

②まずは家族の様子（子供や親）が一番の心配であった。その後は学校（仕事）の状況が気になった、あとは、食料とか停電とか断水のことが気になった。何がつかかったと言えば断水だった。

(5) 事務職員に求められたこと

①事務職員という職種により求められたことはなかった。私自身自らすすんで校区内の児童の家庭へ学校再開までの連絡文書を教職員で手分けして配布して回った。

②事務職員として悔やまれるのは、被害の状況を記録として詳細に残しておくべきだったなど悔む。後々、災害復興のための学校修繕・壊れた備品の購入等復興に向けた予算獲得に重要な証拠としての意味をもってくると思い知らされた。

(6) 今回の災害でご自身が感じたこと

①東日本地震のようにまさに児童生徒が生活している時間であったなら、どういう行動をし、どこに逃げるのか等、具体的な場面を想定しなければ児童生徒の安全を確保できないのではないかと思った。

②最低2、3日は生活できる準備を普段からしておくことが大事ではないかと思った。

③発生直後、情報も無く津波が来るかもしれないと身構えた時、逃げることを咄嗟に考

えた。ツイッターでかろうじて町の消防が機能していないという情報を見た時、……子どもたち…どうか生きててくれ。頭の中はこんな感じだった。今すぐ学校に行かなきゃ！とは考えられなかった自分への複雑な思いはこの先も一生残ると思う。窮地に立った時の判断というのは本当に難しいと思った。そしてその時の自分を思い出すと今でもその思考が正しかったのだろうかと思ってしまう。

④基本的には全て役場対応だった。ただ、私たちも全く関与しないということは人間として憚られる部分もあったので、自主的に避難所である体育館に顔を出したりもした。後になって、あの時教職員がみんないてくれたことが本当に心の支えになったと泣きながら言ってくれた保護者の方もいた。

⑤震源地に近い学校に出勤するのは、公務員の宿命だと管理職が言っていた。宿命という言葉についてしばらく考えた時間があった。

3. 終わりに

災害の傷跡は今現在でも続いている。胆振という地域は、20年から30年周期で噴火する有珠山や前回の噴火からしばらく経っている樽前山など活火山があり、それぞれすぐそばに洞爺湖温泉街や苫小牧市など街地が広がっており、噴火などの災害があれば私たちの生活に直結する。また今回の震源近くには石狩低地東縁断層帯が走っており、この断層はマグニチュード7.7クラスの地震を発生させる可能性がある。

このような地域柄故に胆振支部の発表も過去に有珠山噴火の経験を元に対応マニュアルの研究発表をしてきた。これまでは、災害を経験したらその教訓をもとにマニュアルの作成をするという流れがあったように思えるが、今回の地震で胆振東部の会員やその他の胆振支部会員の多くが、過去の発表情報をすぐに引っ張り出して活用するということが難しい状況であったことを経験した。だからこそ今回のレポートでは、災害が起きた直後に感じたことを共有することで、日頃私たち学校事務職員があらゆる状況を想定しながら過

ごすことの必要性を感じてもらいたいと考えた。

具体的な何かを問題提起して深い協議をするための十分な内容のレポートではないが、災害対策への心の準備の一助になればと思う。